全ての聖夜の鎖

らもん

大阪市立中央図書館
1015864877

全ての聖夜の鎖

らもん

「薄明に野の祈り容(い)れられず
斯(か)くて夜はきしむ卵となりぬ」

その夜、夜間飛行のパイロットは海岸線に不思議なものを見た。三つの蒼白い炎が結ぶ二等辺三角形である。それは暗い波頭と、さらに暗い陸地の結節点に、太古からの紋章のようにポツンと輝いている。

「誰かが夏を密葬しておるのだ」

彼はそう考え、既視感(デジャビュー)にともなうあのほろ酸い悲しみに抱きとられる。

漁夫はドラム罐一杯のガソリンを蹴転がしながら彼の廃船へ辿り着いた。物音に蟹がザワザワと散っていく。昨日、区役所から三度目の通達が届いた時に、漁夫はとうとう腹を決めた。廃船の底をぶち抜いて愚鈍な餓鬼共が骨を折ったのだ。船は漁夫の父の代からのもので、かつては踊り狂う魚達を満載して浜に帰ってきたものだった。舳先(へさき)からゆっくりと船尾のエンジン跡へ、そして丁度導火線代りになる舫(もや)い綱にまでガソリンを撒き終る。

漁夫の肺は油の下司な臭いと潮の香りでむせかえるようだ。

浜は今夜半眼の月の力に支配されている。漁夫はできれば新月の夜にこの船を焼きたかったのだ。看取る者もない完全な闇の中で燐寸(マッチ)を擦って、そのまま歩み去るのが礼儀だと漁夫は信じていた。

「これがわれの最後の仕事じゃ」

その灯りに全ての船が進路を失い、この浜へ——企てられた死の腭(あぎと)へと向って導かれるよう祈りをこめて燐寸が擦られた。

幻燈じみてリアリティを失った四ツ角で、僕等はタクシーに転がり込んだ。ポケットにはそれでも何枚かの紙幣が残っており、もう一杯飲める所もないではなかった。しかし、今夜彼女は気難しく塞ぎ込み、言葉はゴロゴロとテーブルから床に落ちていく。僕等は噛みきれない肉のように、口の中の笑いをしがむばかりだ。年に似合わない生(いき)のいい生意気口も今夜は聞けそうもない。僕は彼女の微笑が好きだ。そして何よりもその魅力的に歪んだ魂が「可愛い容れ物」にしっくりと納まっている様子にひかれている。

そんなわけで、離れがちな心を繋ぎなおす為に、僕はこれ以上のアルコールよりも、加

速度を選んだのだ。ハイウェイが夜に突刺さる所までとばせば、或いは街の凶相が僕等の顔から消えるのかも知れない。車は期待に答えて狂獣のように走る。時間さえも落馬させる勢いだ。

そして夜明け前の一番暗いころ、波の音が聞こえてき始めた。海岸線で車を停め、運転手が振り向いた時、僕はそのどちらかの眼が義眼に違いないと何故か確信した。

へしゃげたガードレールに僕と彼女は腰をおろした。海は凪いでおり、夜のどこかで柘榴の弾ける音までが聞こえてきそうだ。僕は彼女の頭を抱え込み、優しく締めあげてやる。ジグソーパズルの難解さで組み合さった頭蓋骨、柔らかな短い髪（髪を風になびかせるといった脆弱な恣意を彼女は極度に嫌っていた）。凪が終り、定めもつかぬ水平線から微風が吹いてきた。僕等は幾度か接吻した。幸いこの行為を愛と呼ぶような愚か者は辺りにいない。それどころか、この固茹での地表にいるのは僕と彼女だけのような気さえする。

それでも僕には彼女がわからない。どんなペテンが彼女を今夜悲しみに陥れたのか、そんなことは知りたいとも思わない。ただ、頬と頬を寄せた時のその暖みから、僕は二人の

位相の差を感じとる。僕等は何かの理由で降り合せに置かれた果実の瓶詰にすぎない。硝子越しに互いの果肉を眺めあっている。

その時、磯辺に影のように人が動いた。巨大な丸太じみたものを蹴りながらグワラグワラ唸りをたてて。それは何かドラム罐のようなもの——不吉な液体を内蔵したもので、ボチャボチャ音をたてている。僕と彼女は驚きに打たれてそのまま動けなくなった。

闇の地平から同じ漆黒の空へ黒い海鳥が飛び立つ。

男はやがて、浜の中央の廃船のシルエットにまで辿り着いた。滑らかに動きながら彼は罐の中の液体でその船をなぞり始める。舳先から船尾へ、そして導火線のような舫い綱を辿るように。

瞬時に僕等は炎の予感に抱きすくめられた。
減速していく風景の中で、男の無限に緩慢な腕のあわいに小さな火がゆっくり灯る。

彼女の顔がかつてない程強張っているのを僕は見た。大気の岩を削り取って微苦笑のままに彫りあげた横顔（プロフィール）。おそらく僕も同じく硬質の石像となって並んでいたに違いない。ただ眼差だけが男の手元の小さな炎に注がれている。それは投げられた。黒い巨大な船に向って——

　色彩の無い炎が燃え上り、闇は一瞬のうちに切り裂かれた。朽ち滅びる者にのみ許された静かな祭りが今始まっている。海原には凪から蘇生した波頭が象形文字を刻み始めた。それ等は廃船の浄火を取巻いて、神官の陽気さをもってさんざめいている。

　下弦の月が風景を囲繞し、昆虫の微苦笑が僕等の彫像に貼り付いた。

　男は去っていく。炎の中から炎の端境を抜け、炎の外の「温度」の中へ——僕と彼女の金縛りの視線の外へとぼとぼと。

　どれだけの時間、おそらく宇宙の生成から空間への発散までに要したであろう「反時間」、僕等はその無色の炎を凝視し続けた。やがてその浄火は僕と彼女の内に燃え移り、二つの胸に二つの燐火が熾（おこ）り始める。内からの放射によってまず皮膚が溶け始める。彼女と僕を型造り隔絶していた相貌がめくれあがる。そして次に血と肉と内臓が可食性の臭気を放っ

て崩れ落ちていく。最後に骨が、サラサラと傾斜を滑る白砂のように地に放たれた。

今、肉体の蠟は熱く溶け流れ、廃船の上、かつて僕の在った場所、かつて彼女の在った場所に三つの無色の炎がゆらめいているだけだ。その時船の炎と僕等の間には、言葉なく肉体なく死も蘇生もなく、決して生れず、従って寂滅もない、無垢の炎からなる二等辺三角形が発現しているに違いない。

夜空を飛行機が飛んでいく音がする。尾灯をデコレーションのように光らしているのだろう。しかし僕と彼女はもう眼差をあげることはない。僕等はこの浜辺の紋章に氷結し、それは今世界を絡め取る磁場へと滞電し始めている。

「掬したる酒中に柘榴光無く
童は知らでそを盗みたり」

冬の長い勾配に差掛った時、夜の相が突然透明になった。その瞬間まで僕は白濁した風景への嫌悪から被衣を深く鼻まで引きおろし、ただ舗道のみを眺めて彷徨っていたのだった。

薄膜が腐蝕して崩れ落ち、全ての風景がその時香りたった。

圧倒的な樹木の量、それらが地の糧を吸い上げている響音が聞こえる気さえする。彼等は天空に氷結した星宮へ祈りの手を挙げる。それにしてもこの眩暈をおこさせる常緑の香り。僕の頭髪から足爪までが、今艶々とした暗緑に染めあげられたようだ。僕は何度となくよろけては、その都度鋭い葉先に手や頬を切った。それでも僕の蒼く染った肉体から真紅の血は流れようもない。

この坂道を登り詰めた所、鬼子母神の堂内に、僕は今夜訪ねる人がある。それは種々の不幸な成行から僕の懐を離れていった幼い息子である。この坂の上の岡に建つ旧家に少年は僕のかつての妻、そしてその祖母と共に暮している。

或る夜、僕は街の雑踏の中から彼に電話をかけた。女の声が聞こえたなら無言の内に受話器を置くという、それは泥酔の力を借りた賭だった。

涼やかな舌足らずの声が電話口に出ると、僕の名も聞かぬうちにこう言うのだ。

「お月様が痩せて無くなった夜に、鬼子母神のお堂に行くよ」と——

道は曲りくねり、暗緑の葉叢のトンネルの中を上昇して行く。どれ程の時間僕は歩いたろうか。行手に二つの小さな人影が見え始めた。あまりにも透明な大気の彼岸から、それらはゼラチンのようにくゆりながら、この坂を下って来るのである。ひそとした笑いが聞こえ始め、やがてその輪郭が見定められるとそれは支那服を着た双児の老人であると知れた。彼等は互いの腕のあわさった所に空の鳥籠を吊り下げている。極限にまで痩せている為に、彼等二人の相貌の差を見分けることは不可能に思われる。その老人達は笑っていた。やくたいもない中国語の韻律が、何を揶揄する風でもなく、むしろ或る種の哀しみをこめたくぐもり笑いとなっている。彼等は僕の体を幽霊を無視するように無雑作に通り抜けて行った。

それでも僕は坂道を呆然として登って行く。硬質な大気は僕の肉体に無数の穴を穿ち、登り進むにつれて僕は海綿のように不定形に軽くなっていった。

突然、道は真の闇に閉ざされる。坂がその位置で傾斜を緩めた為に、葉叢のトンネルが

全天の星の光を遮ってしまったのだ。僕は闇の中を当もなくいざり歩かねばならなかった。時として石塊が足爪を割ることがあった。激痛と大地との契約に支配されて僕はよろよろと進む。ぬかるみが軟体動物の口の緩慢さで足をとる。

やがて視界を覆う黒の一枚岩の果に、ポツリと輝くイルミネーションが見えてきた。力無く寂しいその文字は、

「彼の園を追われて我此地に有り風嘯（ふうしょう）飯店」

と読めた。漆の剝げた窓枠からはこの真夜中にそれでも黄色い光が溢れ出しており、僕は長い彷徨の果の激しい飢餓と人恋しさに歯向かおう術もなくその硝子戸を押す。店内には闇を潜り抜けてきた僕にとって爆発にも近い光芒が満ち溢れていた。その中で店の隅に陣取って一人の中国人が本を読んでいる。その漫画本の表紙の絵柄が逆さであることから僕は彼の全盲なるを知った。

店の奥から老婆が歩み寄ってきた。この被衣をかむった深夜の来訪者を訝る風もない。僕は炒めた菜と甲殻類の蒸しもの、そして一本の紹興酒を購った。

何杯目かの暗い液体の独酌の盃に僕は小さな蜘蛛の浮いているのを見とめた。指先に掬い上げられた蜘蛛はそろそろと僕の腕を這い登っていく。その時、掻痒感に導かれてか、僕の体に温度が蘇ってきた。そしてこの透明な夜の有様は濁り始め、深い底知れぬ酩酊が

より返してくる。

気が付くと、僕は明滅する交差点の人の波の中にうずくまっており、目の前には夥しい吐瀉物が泥池を造っている。僕はいつまでもその嘔吐の山を眺めている。小さな蜘蛛がそこから糸を引いて走り出した。救急車のサイレンが耳を掠り抜け、それに引きずられた内臓のように夜明が路上に雪崩れ込む。僕はそろそろと立上り莨（たばこ）に火を点す。電柱に寄りかかれば電柱はぐらぐらと揺れ動く。

既に去ってしまった紫水晶の夜、僕は少年（あいつ）に会わずじまいだった。夜の中に封じ込められて、彼は今も鬼子母神の御堂の中に僕を待っているに違いない。

「摘みし葡萄に染むる指
無弦の竪琴（リュート）かき鳴らす
おもえば眠りの浅い夜
御身の姿の白いこと」

彼女が毛皮のように踊り場に晒されるまで、それは何という退屈なパーティだったろう。喰物の臭いに蒸篭った空気の片隅で、僕はからくり人形の単調さで酒を流し込む。薄闇のそこここに白いふやけた顔が幾つも浮び上る。それはかつて西陽の差込むあの教室で、消されてはまた果しなく書き継がれる黒板を眺めていた、見覚えのある表情どもだ。同窓生の多いパーティは僕を腐らせる。やたらに肩を叩く粘液質の掌に誰もが時間の計りを握りしめて突っ立っている。ありふれた消息やスキャンダルの津波、中には女房を連れてくるという卑猥な奴までがいる。僕等はお互いを化石でも前にしたように呆然と見つめあう。かつて「関係」であったものが、今は拡散していく飛行機雲の尾の茫漠としたたゆたいに姿を変えていた。それでも僕が何の痛みもなく打ち捨てていった殆どのものが彼等の中に残っているのを見ると、僕は改めて連中の名を思い出すことができる。

僕は今夜は酔い潰れて誰かを傷つけてやろうと思っていた。その誰かは件（くだん）の薄汚れた同窓生どもではない。砕け散るに真に価するもの。例えば塞ぎ込んでいる為に座るものもない僕の隣りの席にやってくる少年か少女の頬に薄硝子の輝きを認めたとしてのことだ。その時ルシファーの饒舌が僕に乗移り、その少年か少女を自殺にまで追いやることができたなら僕はどんなに身軽になれるだろう。何故なら、本来は天空を通過させる管としてあった僕の肉体は禁忌という澱（おり）に底を塞がれ、今夜苦痛はその容器から満ち溢れているのだか

ら。

その時彼女がやってきた。企てられた音楽のようにトリッキーに。

まずドラムがぬめった空間を叩き割りその裂目から彼女は飛込んでくる。やがて撥弦楽器の第一音――今夜の主催者である悲惨な新婚の亭主に彼女は完璧な仕草で接吻する。声なき讃嘆のコーラスが唱和する中を彼女はゆうゆうと進み、またまた開かれていた椅子、僕の供物の席に腰をおろした。彼女は赤みがかった藤色の上下に同系色の薄紫のベストをはおり紺のハンティグの下からは短気そうな黒髪をのぞかせている。柔かな頬の線は小さな顎で結ばれ、その円環の中に非凡な眼、鼻、口が木の実を喰う動物のようにすばしこく収まっている。そして何よりも彼女を際立たせているのはその胸元の異様な二つのブローチであった。それは陶製の男と女の首で、彼女の乳房の稜線のあたりに並んでとめられていた。ブローチの男はシルクハットを被っており、青白い顔から虚空を射るようにガランとした眼が開かれている。女は不自然に頬を赤く染め、対峙する者の肉体を越えてその背景を見ている。それらはどちらも言いようもなく哀しい顔をして寄り添っていた。彫り込まれただけ、形だけの口元、塗られただけの眼差。彼等は明らかに僕の魂の夜の側の住人達だった。あの暗い舗道を歩いて行く時、前方の闇の途方もない質感におされて立ち止り振り返ってみる。街燈は暗く、水塊を砕くように裂き進んできた僕の軌跡は闇の中に跡形

もなくなっている。そんな夜の中にこのブローチの男女が佇んでいたとしたらどんなに似つかわしいことだろう。僕はこれらのブローチを造った何者かの手、店先からそれを選び取った彼女の精神のありよう、そして今夜それらを胸元に飾らせた日没の疎ましい悪意を一瞬にして想起することができた。

それでも彼女は生気に溢れていた。胸元のブローチの放つ暗い笑いを支配するように、彼女は人を傷つけ、微笑で暖め直し、呆気にとられるようなとんぼを世界の前できってみせる。何人かの人間(特に女ども)が呆れて彼女のまわりを去っていき、僕の隣りに陣取った彼女の周囲には紫色に血管を膨ませた男達が群れ集ってきていた。彼女の歪んだ美しい口元が連中を斬りつけると男達は驚いて一旦退き己れの傷の深さを確かめてみる。それが心臓にまで達しているのを知ると彼等はその事態を信じまいとする。喰込んだ刃を気のきいた冗談に仕立あげて空元気を取戻し、やがてまた彼女のまわりに集ってくるのだった。

室内は益々温気を孕んできた。僕は外に出ると路上に腰をおろし、シャーベットのように夜気を楽しんだ。見上ると満天の星々はそれぞれの伝説にまとわりつかれて空一面がまるで意味の海のように見える。こんな夜、星々に始原の涼やかな無を取り戻してやる為に

なら、僕は無数の礫（つぶて）で最後の人間を打ち殺しさえするだろう。

軽い足音が聞こえ、彼女がやってきた。彼女もまた室内の喧噪に耐えかねたのだ。僕等は挨拶を交し互いの名を教えあった。ガードレールに腰をおろすと僕等は星の話をした。彼女の視力は異常に発達しており、こんな夜は粉をふりまいたような全ての星々の瞬きが見えるのだそうだ。

〝鼻がよくなくてよかった〟

と僕は思った。ここ何年もかけて魂の中で静かに腐らした林檎の異臭を彼女なら僕の耳の穴からでも嗅ぎわけたに違いないから。

小一時間も話しているともうパーティに戻る気はせず、僕等は相乗りでタクシーを拾った。互いの家は逆方向だったが僕はもう少し彼女といたかったのだ。僕はブローチのことに話題をもっていった。ブローチの男はバロン・フォン・ヌァビエ、女はレディDと名付けられ、それらは深夜のホームで倒れていた男の帽子から彼女が盗み取ったものだという（名は彼女の知己である女霊媒によって付けられた）。彼女の言によればヌァビエとDはこの世の域を越えた愛の暗闇の中に寄り添っており、何者も凶事なしに彼等を引離すことはできないのだそうだ。従って彼等を司る神である彼女は、その胸元に絶えず離れぬように二人を寄り添わしているのである。

「樟脳の匂いがする」

彼女はそう言うと僕のスーツの胸元に顔を近付けた。彼女の鼻がネクタイの内側に入り込み、僕は一瞬息を詰める。その髪の柔らかい匂い、胸に当る小さな鼻——ペルシャ猫のコケットが僕を満たし、それは車外にまで溢れだしては夜を彼女の香気で染めあげる。腕の輪の中に抱きとめようとすれば彼女はからかうように摺抜けるだろう。

一杯に開けた窓からは程良く冷えた夜気が滑り込んでくる。こんな夜は風さえもが無辜ではない。何故ならそれは彼女の髪を吹き上げ、仄白い耳朶を見え隠れさせるからだ。僕は犬歯を押し当て、そこから秘密の肉の一片を優しく噛み取ってやろうとする。彼女は意に反して大人しくその片耳を預けている。

突然僕は凶暴な衝動につき動かされる。それは彼女が二つのブローチによって囲繞されている幻想の檻を打ち壊し、手中から魚を放つように彼女を在るべき地平に帰してやりたいという想いだった。僕は彼女をさらに抱き寄せると形のいい唇に接吻した。臆病な盗人のように、舌がおずおずとその白い歯を探りあてる。指先はその瞬間彼女の胸からブローチの一つ、レディDを掠め取っていた。

タクシーがガランとした通りに停り、僕等は明日の再会を約した。彼女は何も気付かずに車を降りると、幾つ目かの辻でフッと消えてしまう。

部屋に灯を点すと僕は冷蔵庫から冷えたジンの壜を取り出した。カーテンに盗み取ったレディDをとめて眺めてみる。もし彼女の言ったことが真実なら、寄り添う暗黒の中から引離された彼等の呪詛は僕と彼女のどちらに厄災をもたらすのだろう。ブローチを奪い去った僕か、彼等の祈りを裏切った守護神である彼女か、或いはその両者にか。

時計が三時を打ち、僕は浅くいがらっぽい眠りにおちた。

明け方近く、僕は半睡のうちに彼女の夢を見た。空中に巨大な透明の球体が浮び、その中心点に彼女は裸体で封じ込められている。その体を奇妙な蔓が這いめぐり、美しい胸や腿に名も知らぬ真紅の花を咲かせている。彼女は死んでいるのではなく、微笑んだまま時間と共に凍結されているのだった。或いはうねり進んで行く時間の切口の一つの断面に永遠に彫り込まれているのかもしれない。そして彼女の額にはバロン・フォン・ヌァビエが凶星のように暗く輝いている。その顔にはもう悲哀の色さえ無く、全ての意味を剥離された静かな笑いを僕に向けているのだった。

無意識のうちに僕はベッドから起上り莨に手をやる。薄明の部屋の中で僕はその時見た。窓際のカーテンの中央にレディDが灼熱した宝石のように輝いているのを。透明なオレンジ色のその輝きの中心からレディDの顔の輪郭がかすかに見分られる。

僕は見詰め続けるうちに全てを理解した。やがて朝の光が差込んでくればこの輝きも失せるだろう。しかし僕はこの朝、海釣の用意を整えレディDと共に名も知らぬ磯浜へ行かねばならない。そして僕はこのブローチを糸の先にたらし、その海辺に座り続けるだろう。約束の魚がそれを奪い去るまでの永劫の時間を……

後　記

僕の背中には「卑怯傷」が一つある。それは十月の某夜、紫水晶の瞳を持った雌猫に予告もなく引裂かれたものだ。僕はその時、或る特殊な感情にとりつかれた。その説明のしようのない感情はそれから三ヶ月が過ぎた今になっても僕を捕らえて離さない。僕はそれに特定のシチュエーションを与えると奇妙な音色が響き渡ることを発見した。

従ってここに収めた三つの掌編は、バラライカの三弦のように音程の差こそあれ単一のトーンに基いて書かれている。聖夜にいざなわれた者達が彷徨の果、それぞれの約された地に導かれるという設定も共通である。

これらの夜への入口は、人気の無い街路であればどこにでも開いている。人々は夢の中でそれらを見失い、たまさかの現実の路上で邂逅するのだ。

現に今、一人でこれを書いている僕の家の前で、柔らかな肉をもった足裏の響きが立ち停った。

もうすぐチャイムが鳴るだろう。

一九七八年十二月三日未明

二十年たって

その年、おれは絶望的な片想いにおちいっていた。
それはこの世ではかなわぬ想いであり、またかなえてはならない想いであった。
おれはその苦しさを毎日大量のハイミナールとアルコールでまぎらしていた。
そんなある夜、やはり大量のハイミナールを服んで福知山線ぞいの我家への道をたどっていると、突如として夜の諸相が透明になった。それまでもやもやとしていたものが急に晴れ上った、そんな感じだった。
「天空がおれを突き抜けた」
おれはそう思った。そして、家に帰って、この物語を書き始めた。
一夜で三篇の全てを書き上げた。

さて、書いたのはいいが、これをどうしたものか。
出版しよう。それも一部だけ。彼女へのプレゼントとして。
それが結局色気が出て百部刷ることになってしまった。
この本にバラのドライフラワーを付けて彼女にあげると、彼女は何だかぽかんとしていた。

その頃おれは印刷屋の営業マンをして、先ゆき自分が文筆でメシをということは考えもしなかった。
野心がない。
その分、ピュアな一冊だといえる。
今回二十年たって復刻版を出すことにした。ご笑読下さい。